串原村に住む山の神様

名人　三宅　尚巳（80）　岐阜県恵那市
聞き手　後藤　拓朗　静岡県立静岡農業高等学校3年

平成18年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県において は、現在、23名の「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. 名人の仕事「ヘボ編」

僕がやっとる仕事は大きく2つあるんです。1つはヘボ。つまりクロスズメバチの保護や増殖の仕事をやっとります。

6月～8月ぐらいのあったかくなった時期によォ、山へヘボの巣を探しに行くんや。やりかたは山のヘボがおるようなところでまず土に棒をくすげて、棒に魚かなんかの生肉をつけるんですわ。そんでもって蜂がその魚のにおいに誘われて舞ってくるんだわ。そこでヘボにわたをつけてやって、わたが付いたまま飛んでゆくヘボを何人かで走ってぼってくわけよ。それが、とてもえらいけど、楽しい作業の1つなんや。そんでもって逃げていく蜂は巣に入るんで、その巣をとるんよ。ヘボの巣は土の中にあるんで「地蜂」という言い方もしよる。

こうして捕獲したヘボを自宅の庭や「ヘボの家」で飼育をやっとる。秋には女王蜂と雄蜂を交尾、捕獲、越冬させるんや。そして、春になったら冬眠から覚めた蜂を山にはなしてやるんや。

餌を食べるクロスズメバチ

第一にね、ヘボは肉食やもんでよ。それだから、スーパー行って若鶏のレバーを買って来て、そして、同じもんばっかだと人間でも飽きることがあるもんで、その日その日によって魚をやったり、それから、かえるを田んぼから捕ってきてやったりして、餌を変えては与えて大きくするように願ってやっとる。

その他に僕の仕事としては良い女王蜂をつくることに夢中になっておるんよ。本当、僕にとっては孫やひ孫のように可愛いもんでのう。一生懸命努力して、ヘボにあった条件を兼ねてやるようにいま一生懸命努力しておるところなんや。

今、僕のハウスで飼育しとるのは「ツヤクロスズメバチ」って言うんやけど、その他に海抜の高いところ、1300メートルくらいのところには「キイオビスズメバチ」、それから、北海道に行けば「ドウナガスズメバチ」とかいろろ種類があるんやけど、それらを連れてきても串原ではあかんのよ。やっぱり、クロスズメバチとシダクロスズメバチ。この2種類は東海地方では盛んに飼育されておるんや。

去年の正月に亡くなられたんやけど、金沢大学を出て高校の先生をやってた西尾さんという方がおって、その西尾さんはヘボが大好きでよ、自分で主にヘボの増殖や冬眠について研究してたもんでヘボやっとる中じゃ、もう神様みたいなもんやったね。その同級生の方が串原の隣にある明智町（日本大正村）におったんですわ。そこで僕もヘボが好きだからその方と話をしてみたけど、それがとても良い話でっそこからだね、この村全体でヘボをやっていこうって思ったのは。

それからヘボ愛好会を僕がつくったわけ。皆がついてきてくれたこともあって、NHKとかの全国版の番組（ETV特集）に取り上げられてよ。そこからいっきに全国から蜂の子の問い合わせや、専門家の方たちがヘボハウスを見学しにきたり、いろいろと忙しくなってったんですわ。ヘボの増殖は香川や静岡とか、もう全国に広まりましたわ。こうして「ヘボといったら串原だ」と言うくらい有名になって村おこしにつながったんですわ。僕にとってヘボは孫かひ孫の御守りをするようなつもりで接しとるでよ。まぁおばあさんはその次かな？

▼三宅尚巳さん

2. 名人のもうひとつの顔

それから僕はヘボの面倒だけをみとるのではなくてよ、山の管理もしとるんや。いったい山で何をするかっていうと、主に木の枝打ちや下草刈りをしとる。でも今は昔に比べて衰えちまってなかなかえらいこともあるけど、まぁ今でも木の上へ17～18メーターは登ってまうよ。

まぁ山の仕事は手入れすればするほど成果がでて、それに応えて、木もええものになってくれるんで面白いんですわ。ほいで、山の管理が行き届けば行き届くほどヘボもたくさんおる山になって行くんだわ。だから、あんたと同じぐらいの頃から山の手入れを親としとったわけよ。

特製の餌を与えている三宅さん

3. 山と林の関係及び植林方法

一般的に山は裾野に行けば行くほどよく土が肥えているんですわ。ほいで、頂上に向かうほど土もだんだん、なんと言うか…質が悪化していくんや。ほんで、山の中には場所によって適する木とそうでない木があるんですわ。裾野ならば、「杉」が最適だし、中腹なら「桧」なんや。「杉」は全国どこでも生育できるし、湿気とか寒さにも強いで、やりやすいんやね。

昔は上層部に「松」なんかをやったけども、マツクイムシっちゅう虫が松を食っちゃうもんでよ、なかなか難しいね。他には裾野と上層部に杉・桧を植えて、中腹には一年間通してずっと緑の常緑樹や落葉樹を植えるわけ。それらの木は根張りが強くって崩落とかを防ぐんでよ。これを複層林とか混交林って言うんや。それとか、ここらの低い山だと木の競争が増えてまうもんで、上ばっかりに伸びてまうんだわ。だもんで、よく間伐とかして間引いてやらんといかんもんでよ。木の植える本数は1haで3000～4000本は植えるんよ。

4. 林業のお仕事

山でやる仕事では、まず「枝打ち」っちゅうものがある。枝は始め、そうだね…ビール瓶ぐらいの太さで、まぁ大体この時期に枝打ちを多くやるんですわ。生長が盛んだしよ、やっぱこういう時期が多いんやて。まぁ冬が一番多いね。

よく使うのはナタだね。両刃ナタ。両方から切れるんで食い込みがないでね。普通のやつは片面だけども。そして腰ノコ。園芸用に使ったりそういうやつです。ピッチの細かいやつほど良いわけ。それから大きい木になりゃ機械電動力のチェーンソーでやったりねぇ。それから「枝打ち機械」っちゅうもんもあるもんでね、エンジン付きの。まぁそれから自分で登ってく木登りのロボット。実際に使ってたけどね目方がものすごいあるもんでねぇ、もっひとりじゃあ山の移動が困難だったもんで、今修理に出しとるんやわ。

それから、複層林は木が100本も200本もあるところを、ある程度の間隔で残してねぇ、その木の下へまた植林するわけ。そこで、複層林の樹種は「杉」だけど、普通の杉とは違うわけ。「みがき丸太」。この「みがき丸太」はお座敷の床柱で杉の柱があるわけ。それをつくる木を植えとるわけ。それでねぇ、この「みがき丸太」で天然のしぼりの出る苗をここに植えとるわけ。ほで、これはどうやって仕入れてきたかっちゅうとね、三重県の関町に特林家があってそこへ行って枝を頂いてきて、その枝を挿し苗にして本数を増やしたりね、それから苗を買ったりね、そうやってつくったわけ。芽接ぎや実まきもやる。天然に生えた木があるでしょ杉苗が。そこのさきっぽを切ってそれを差し込んでね。それだとね、ビニールで小さい袋かぶせて水分が蒸発せんようにしてやるけどね、これが元が曲がっとったりすると悪いもんで、支柱立てて真っ直ぐ無理して曲がりを修正するんやけど、これがものすごい手間食うもんでね、何本かやってみたけど、出来た木が曲がった木になっちまうんでね。だからやっぱり挿し苗が一番やね。

枝打ちの様子

枝打ちの様子

5. 一番大変な作業（下草刈り・施肥）

下草刈り。夏にやる仕事だで、これが一番つらい。まぁ樹高が背丈くらいになってくると、もう、しめしめでね。そうやね、3年くらい続けていくと旺盛になってくるからねぇ。

その暑いときに草を刈ってやると、木にも良いしね。その刈った草が堆肥になるんでね。そのまま持ち出さんで木の元へ置いておくわけよ。刈った後は、気持ちも良いしねぇ。そりゃ子供育てるのと一緒だわね。それから、肥料もやると良いしねぇ。だけど、そこまでやるのは大変だわね。

6. これからやって行くこと

これからの時期に入っていくと、そうだねぇヘボの冬眠の管理をやるね。1箱につき冬眠するヘボを30匹入れて僕が掘った横穴で冬眠させるんですわ。冬眠中は月1回の間隔で面倒をみてやるんだわ。なにをするかって言うと乾燥具合をみて、乾燥している箱には水分を入れてやるんや。それを3月いっぱいぐらいまでやって、今度は4月になると温度が上がってくるでしょ？この温度上昇を防ぐために、なんていうかなぁ…水分を含ませた布を箱に覆うんですよ。そうすることで温度が上がりにくくなる。まぁ冷却するって言った方が良いかも分からんね。そこで、冬眠から眠が覚めたら特製のドリンクをヘボにやって、山に放す。こんな次第です。

そうだね、将来はまだこれからもずっとヘボとともに暮らしていくと思っとります。暇がありゃ山へ行って木の手入れを今まで通りやっていこうと思っとります。ついこないだも、間伐やってきたでよ。まだまだ、元気。まぁ力のある限りはヘボと山に尽くしていこう。そう思っとります。

名人　三宅尚巳（みやけ・なおみ）さんのプロフィール

- 生年月日：大正15年2月2日生まれ
- 出身地：岐阜県恵那郡串原村
- 仕事内容：ヘボ増殖・農林業

昭和18年から農林業に従事。平成5年に「串原ヘボ愛好会」を設立し会長に就任。平成11年に「全国地蜂連合会」を設立し会長に就任。これらが主に村おこしにつながった。また、平成12年には岐阜県観光地メイクアップ推進事業で優秀賞受賞。現在も現役で活躍している。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
（社）岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】